非れば、本紀は少くとも此の年に於て磨延啜の位に在りしことを示せるものにして、從つて新唐書以下の記する所を以て正しとせざる可らず、舊唐書廻紇傳には此の如く乾元二年「夏四月廻紇毘伽闕（卽ち裴羅）可汗死」と記せども、唐會要には、乾元「二年四月英武威遠毗伽可汗（卽ち磨延啜）卒」と記したれば、舊書が裴羅の死として掲げたる年月は、實に又磨延啜に關するものを誤りたるに外ならざるや明かなり、磨延啜の死に就きては、別に冊府元龜（卷九六七）繼襲篇には「乾元三年葛勒卒」と記したれど、然も乾元元年唐より磨延啜に降嫁せし寧國公主が、可汗の死に遭ひて唐に歸りしは、舊唐書本紀及び廻紇傳共に乾元二年八月とすれば、可汗の死が此の時以前に在るべきは論を俟たず、又新唐書回鶻傳に、寧國公主降嫁の明年、卽ち乾元二年「俄而可汗死……（公主）以無子得還」と記せり、此等の記載を併せ考ふれば、磨延啜の死が唐會要所載の如く乾元二年（七五九年）四月なりしことは疑無き事實といふべし。〔六九〕

此の可汗に就きては唐會要は「勇悍善用兵」と記し、新唐書回鶻傳にも亦「剽悍善用兵」と記せるが、其の治世中特に注意すべきことは、始めて唐に對して軍事上優勝の地位を占め、以後茲に所謂第二期を通じて、强き壓迫を其の上に加ふる基を開きたることとなりとす、抑も唐代の盛時なる太宗高宗の時代に當りては、南北朝以來常に北方に雄視して支那を苦しめたる突厥は一旦滅ぼされ、漢族の勢威は漠北を風靡したりしが、武后の時默啜の出づるに及びて、復た勢力を恢復し、唐は再び其の威壓に苦しむに至れり、玄宗立ちて鋭意治を圖り、開元の盛運を開けりと雖、尙外突厥に對しては進みて掃蕩の計に出づる能はず、好を約して其の侵寇を戒むるに過ぎざりき、而して回鶻は此の間を通じて或は唐に歸し、或は突厥の支配に屬し、裴羅の時に及びて遂に突厥を倒し、代りて漠北を統一